SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

日本語学習者によるオノマトペ習得についての探索的研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学言語学研究会 公開日: 2024-03-28 キーワード (Ja): オノマトペ, 擬音語, 擬態語, 日本語学習者 キーワード (En): 作成者: 谷口, ジョイ, 桑原, 大輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000506

日本語学習者によるオノマトペ習得についての探索的研究

谷口ジョイ・桑原大輔

キーワード：オノマトペ、擬音語・擬態語、日本語学習者

1．はじめに

本論文は、日本語を第二言語として学ぶ留学生にとって、(1) どのようなオノマトペの習得が困難であるか、また、(2) 未知のオノマトペを産出する際にどのようなストラテジーを用いるのかを明らかにすることを目的としている。

オノマトペとは、擬音語（擬声語）・擬態語を包括的に表す語であり、古代ギリシャ語の「ὄνομα」(名前）と「μαθημα」(学ぶこと、知識）を組み合わせたものである。田守（2002）によれば、「オノマトペ」は「造語」あるいは「命名」を意味する古代ギリシャ語に語源があるとされる。擬音語は、外界の音や声を写し取ったことば、擬態語は物事の状態や様子をいかにもそれらしく写し取ったことばであると定義されている。オノマトペは、迫力や臨場感、生気、ユーモアをもたらす言語表現であり、日本語において、オノマトペ抜きの会話は、ほとんど不可能とされる。また、漫画、文学、童謡といった創作作品にも多用されている。

また、日本語オノマトペには地域変種（方言）もある。赤間（2022）は、小声で泣く様子を表すオノマトペの形態について地域差という観点から分析し、その結果をまとめたものである。当該研究は、「消滅する方言語彙の緊急調査研究」第6調査票（2002年度）の項目である「声を出さずにしくしく泣くようすを、どのように泣くと言いますか」で得られた回答の中から、生え抜き話者の回答である786地点のデータを資料としている。赤間は、小声で泣く様子を示すオノマトペが地域によって「シクシク類（クシクシ、クスンクスンなど)」と

「メソメソ類（メチョメチョ、ベチョベチョなど）」に大別されることを示した上で、促音やラ・リが付加されるという音韻的特徴をもった語の地理的分布について精査している。こうした地域変種は、日本語学習者によってオノマトペの習得をさらに困難なものにしていることが予想される。

日本語オノマトペが、日本語学習者にとって習得が困難であることは、複数の先行研究で指摘されている（三上，2006）。しかし、学習者による日本語オノマトペの使用実態を実証的に調査したものは、その数が限られており、どのようなオノマトペの習得が困難であるか、また、学習者のオノマトペ習得にかかるストラテジーはどのようなものかについては、研究が及んでいない。

２．先行研究

日本語学習者のオノマトペ使用を調査した先行研究としては、グェン・ティ・タイン・トゥイ（2017）が挙げられる。この研究では、研究者自身が製作したアニメーションを学習者に視聴してもらい、オノマトペの産出を引き出す特定の状況を日本語・ベトナム語両言語で描写するというタスクを課している。その上で、調査協力者が、どのように当該オノマトペを習得したかについての質問紙調査も実施した。その結果、同じ場面において使用するオノマトペには日越両言語に対応関係にある語が多く存在し、学習者はベトナム語訳で意味を覚えていることが明らかとなった。また、グェン・ティ・タイン・トゥイ（2018）は日本語学習者が、オノマトペを適切な場面で使用しているかに着目し、その産出についても調査を行っている。独自のアニメーション映像を使って、既習のオノマトペについて調査を行った結果、母語でのオノマトペ使用が少ない中国人日本語学習者による日本語オノマトペの正答率は、母語でのオノマトペ使用が比較的多いベトナム人日本語学習者と比較し、有意に低いことが分かった。両研究から、日本語オノマトペの習得に際し、母語であるベトナム語の「正の転移」が見られることが示唆される。

一方、日本語教師を対象としたオノマトペ研究も存在する。蘇（2021）は、中国人の日本語教員へのアンケート調査によって、日本語教育へのオノマトペ導入のあり方について検討している。日本語オノマトペの使用実態を具体的な例に基づいて分析した上で、中国における日本語教育においてオノマトペがどのように教授されるべきかを考察している。また、中国語母語話者にとって、オノマトペ習得を困難にする３つの要因が示されている。一点目として、中国

語母語話者が日本語のオノマトペを学習する際に、単なる特徴や規則性（属性）の習得にとどまり、母語との深層的な違い（身体性、共有、臨場感）に着目していないことが挙げられている。二点目に、日本語教育において、オノマトペの特徴に関する学習を軽視する傾向が見られることが指摘されている。最後に、中国人学習者は、母語による概念の説明に過度に依存しており、どのような場面で使用されるかに意識が向いていないことが指摘されていた。

日本語学習者がどのようなストラテジーを用いて未知のオノマトペを産出するかについては、管見の限り、ほとんど研究がなされていないが、音象徴との関わりから論じたものがわずかに存在する。例えば、周・葛（2022）は、音象徴という観点からオノマトペの習得を論じた先行研究である。当該研究は、中国人日本語学習者が日本語のオノマトペに対して有する、音象徴上の具体的なイメージを明らかにすることを目的としている。周らは、日本語を専攻とする中国人学習者に6語基×4パターン（ABっ型：かちっ、ABり型：かちり、ABん型：かちん、ABAB型：かちかち）の合計24語のオノマトペを聞かせ、学習者がそれぞれの語に対してどのようなイメージをもっているか（早い ― 遅い、強い ― 弱い、など）についてアンケート調査を行っている。その結果、学習者は「ちくちく」のようなABAB型のオノマトペに「繰り返し、連続」のイメージを有し、「ちくっ」のようなABっ型に「瞬時性、急激、唐突に終結、収束」、「ちくり」のようなABり型に「ゆったりとした感じ」といった感覚を抱いていることが明らかとなった。

また、廉（2022）は、ABAB型オノマトペの音象徴を扱った研究である。当該研究では、A・Bの位置にある音の要素を母音・子音で分解し、全体での傾向性を明らかにした。さらに対応分析を用い、代表的な音象徴を持つABAB型オノマトペを選出した上で、その意味傾向を探究するために共起語を調べている。加えて、清音語と濁音語の共起語の差を分析した。その結果、オノマトペの意味と音のつながりの新たな視点を見出している。

これらの先行研究を概観した上で、冒頭で掲げた2点の研究課題について以下の仮説を立てる。

（1）どのようなオノマトペの習得が困難であるか

上述のように、今回の調査は「基本オノマトペ」から対象語を抽出している。これは、意味や用法の習得が容易であり、日常の多くの場面で使用可能なものである。よって、正答率に差異が生じる場合、それは使用頻度によるものでは

なく、類似した形態との混同（「ハラハラ」、「バラバラ」、「パラパラ」など）が影響することが考えられる。

（2）未知のオノマトペを産出する際に、どのようなストラテジーを用いるのか

学習者は、既存のオノマトペの知識を用いて、未知のオノマトペを産出している可能性がある。

３．研究手法

３．１　基本オノマトペの選定

先述のように、日本語学習者を対象としたオノマトペの研究は、その数に限りがある。三上（2006）では、第二言語学習者にオノマトペを指導するための指針として、「基本オノマトペ」の選定を行った上で、教材化の試案を提示している。「基本オノマトペの選定」にあたっては、（1）意味や用法の習得が比較的容易なもの、（2）汎用性の高いもの、（3）日常における使用機会が豊富であるもの、という基準に基づいており、その結果、87語の擬音語・擬態語が候補となった。さらに、初級後半から中級段階の指導・学習にとって基本的かつ必要な語であるかを検討するために設けた４つの基準に基づき、語の削除・追加を行い、最終的に70語が「基本オノマトペ」となった。４つの基準に関しては、意味や用法が難しい語、同様の表現意図が表出できると考えられる語、易しい文脈の中にあると考えられる語等の条件が用いられた。教材化にあたっては、学習、および教授資料としても使用できるよう、用法・意味・会話例が示された。当該研究は、日本語学習者にとって優先度の高いオノマトペを導入する際の指針を示した重要なものである。本研究においても、「基本オノマトペ」から対象語を抽出し、設問を作成した。

３．２　調査協力者および調査方法

静岡県内の３大学で学ぶ日本語学習者126名および、日本語母語話者150名に調査を依頼し、2022年６月から７月にかけて回答データを得た。研究協力者の年齢は、日本語学習者が平均23歳（20歳～34歳）であり、日本語母語話者は、平均38歳（13歳～65歳）であった。

本研究では、ウェブ調査（Google Forms）によってデータを収集した。日本語学習者を対象とする調査は、静岡県内の３大学で日本語教育を担当する複数

の教員に依頼し、授業内での実施を依頼した。調査にあたっては、辞書等を見ずに回答するように指示が与えられた。ウェブ調査は、その簡便さから、回答の確実性について疑義が生じるとの指摘があるが、吉村（2020）では，郵送による質問紙調査とウェブ調査には結果の偏りがないとされる。一方で、ボランティアパネル（モニター登録による調査参加）によるウェブ調査については明らかな非標本誤差があると指摘されているが、本研究は、対面による調査を実施しており、ボランティアパネルとは調査設計が異なる。日本語母語話者の調査協力者については、スノーボールサンプリング法によって確保した。具体的には、ユーザー同士がメッセージを送受信することができるアプリケーション（例：LINE）によって、日本語を母方言とする友人・知人に調査フォームのURLを送信する、あるいはソーシャルネットワーキングサービスによって調査協力を依頼するという手法を用いた。

日本語学習者を対象とした調査フォームでは、年齢、日本滞在歴、日本語学習歴、日本語能力試験の取得級、出身国、大学名といった基本情報を収集し、日本語母語話者を対象としたフォームでは、年齢のみを回答してもらった。後続の設問では、短文と静止画を提示し、括弧内にオノマトペの入力を依頼した。なお今回の調査では、最も汎用性の高い語基反復型（CVCV－CVCV）のオノマトペ（例：「キラキラ」、「ゲラゲラ」）について調査を行った。

３．３　分析方法

結果は、クロス集計表にまとめ、「日本語学習歴」および「日本語能力試験の取得級」と正答率との関連を見るために、カイ二乗検定を行い、カイ二乗値、有意水準、p値を求めた。なお、「日本滞在歴」についても回答を収集したが、コロナ禍によって来日できなかった日本語学習者がいることから、今回の分析指標としては用いないこととした。

４．結果

本章では、調査結果を示し、説明を加える。以下の**表１**および**図１**は、日本語母語話者と日本語学習者の正解率をまとめた表とグラフである。以下、設問ごとの結果を示す。

表１　日本語母語話者および学習者の正答率（％）

	日本語母語話者	日本語学習者
カラカラ	99.3	26.6
ゲラゲラ	78.5	23.8
クルクル	90.6	11.1
キラキラ	96.0	36.5
サラサラ	89.3	7.9
ドキドキ	93.3	57.1
フラフラ	86.6	22.2
ノロノロ	73.8	30.2
ニコニコ	85.9	55.6
ペラペラ	99.3	50.8

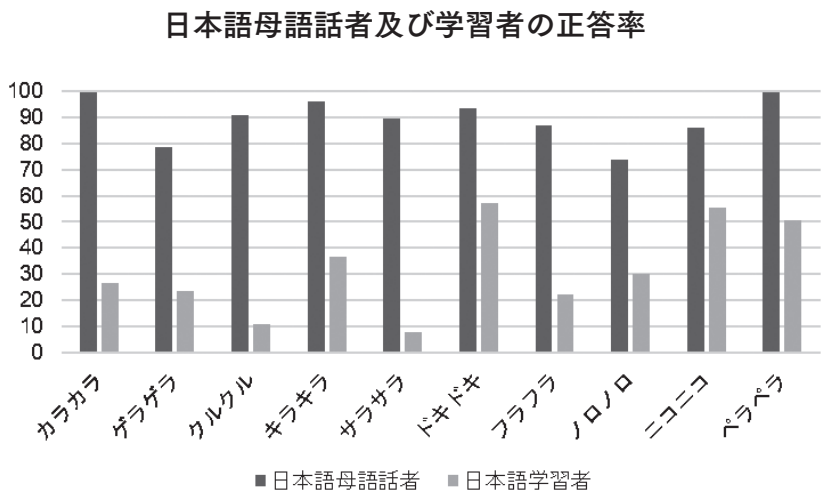

図１　日本語母語話者及び学習者の正答率

結果について、今回日本語学習者を対象に調査したオノマトペは、最も高い正答率でも57.1％となっており、低いものは7.1％と、差分が大きい。また、誤答も多岐にわたった。

４．１　「カラカラ」の概要と日本語学習者の回答パターン

「カラカラ」は、以下の設問および静止画により調査を行った。

設問（1）暑くて喉が（　　）だ。正答：カラカラ[1]。

「カラカラ」は、複数の意味をもつオノマトペである。阿刀田・星野（1995; p.61－62）には、以下４通りの意味が記載されている。

① 固くて軽い物体が連続して回転する時に打ち当たる音。
② 固いものが軽く転がる音やようすに似かよう感じの、屈託のない高笑いの声・ようす。
③ 乾き切って水分が全くなくなっているようす。
④ 中身がまったくなくなったり、空洞になったりしているようす。

阿刀田・星野（1995; p. iv）における意味分類は、「音声・運動など聴覚的・視覚的にとらえられる具体的な」擬音語・擬声語が記され、より抽象的な擬態語へと区分されている。上述の①および②は、擬音語・擬声語であり、③および④は、擬態語である。本調査においては、③の意味を有する修飾用法（修飾される語を述語とした文型）を取り上げている。付された例文にも、設問と類似したもの[2]が記述されている。

島本（1989）では、以下のような分類になっている（p.36－37）。

① ふつうの状態ならあるはずの湿気がないようす。
② ［「笑う」が後にきて］大きな声で笑うようす。

島本（1989）は、日本語学習者のために編まれた辞書なので、意味の説明は簡略化されており、例文では「そのことばが自然にでるような状況」（p.5）が示されている。本調査で扱う①の意味については、「暑いし、のどがからからに乾くし困った」という例文が付されている。

本設問における日本語母語話者の正解率は、99.3%である。一方、留学生の

---

[1] 留学生を対象とした調査においては、すべての漢字にルビが振られている。
[2]「応援でどなっていたらのどが**からから**だ。ジュースでも買ってきてよ。」（p.62）

正答率は、26.9%となっている。オノマトペ以外の回答（かわく等）は、28.6%であった。加えて、25.4%の留学生が「ペコペコ」、「カワカワ」、「カサカサ」、「ヒリヒリ」、「イガイガ」等、語基反復型のオノマトペを回答として挙げていた。

本研究では、日本語学習者によるオノマトペの正答率と日本語学習歴との関係を見るため、カイ二乗検定によって、日本語学習者による「カラカラ」の回答パターンの分布が、日本語学習歴の分布に従っているかどうかを検討している。その結果、カイ二乗検定の統計量は9.75であり、自由度（ある統計モデルがもつパラメータ数）は9、p値は0.37であった。よって帰無仮説は棄却されず、「カラカラ」の正答率と日本語学習歴の関連は認められなかった。

また、「カラカラ」の回答パターンの分布が、日本語能力の分布に従っているかどうかについても検定を行った。その結果、カイ二乗検定の統計量は20.04であり、自由度は15、p値は0.17であった。よって、「カラカラ」の正答率と日本語能力の関連についても認められなかった。

４．２　「ゲラゲラ」の概要と日本語学習者の回答パターン

「ゲラゲラ」は、以下の設問および静止画により調査を行った。

設問（2）彼は大声で（　　）笑っている。正答：ゲラゲラ

「ゲラゲラ」は、単一の語義をもつオノマトペである。阿刀田・星野（1995; p.144）には、「大声で無遠慮に笑う声」と記されている。当該辞書における意味分類によれば、このオノマトペは擬声語である。また、島本（1989）では、[「笑う」が後にきて] 大きく口を開けて陽気だが下品に大声で笑うようす、と定義されており、「寄席では皆げらげら笑う」という例文が付されている。

本設問における日本語母語話者の正解率は、78.5%である。一方、留学生は、23.8%となっている。オノマトペ以外の回答（腹を抱えて等）は32.5%であった。また、34.9%の留学生が「クスクス」、「ウキウキ」、「ニコニコ」、「ペコペコ」等のオノマトペを回答として挙げていた。

次に、日本語学習者による「ゲラゲラ」の回答パターンと日本語学習歴との間に関連が認められるかについて、カイ二乗検定を用いて検討を加える。カイ二乗検定の統計量は8.04であり、p値は0.52であった。よって前節と同様に、帰無仮説は棄却されず、「ゲラゲラ」の正答率と日本語学習歴の関連は認められないことが明らかとなった。

また、「ゲラゲラ」の回答パターンと日本語能力との関連について明らかにするため、同様にカイ二乗検定を行った。その結果、カイ二乗検定の統計量は14.69であり、p値は0.47であった。よって、「ゲラゲラ」の正答率と日本語能力についても関連は認められなかった。

４．３　「クルクル」の概要と日本語学習者の回答

「クルクル」は、以下の設問および静止画により調査を行った。

設問（3）ペンを（　　）回す。正答：クルクル

「クルクル」は、複数の意味をもつオノマトペである。阿刀田・星野（1995; p.136－137）には以下４通りの意味が記されている。本調査においては、①の意味を有する修飾用法を取り上げている。

① 軽快に連続して回るようす。それ自体が回るようすにも、そのものが輪をえがくように移動するようすにもいう。
② 活動や思考が活発で行き渡るようす。
③ 変化がめまぐるしいようす。
④ 長い物を軽快に巻いたり、巻いてあるものをほどいたりするようす。また、長く細いものがものに巻きつくようす。

また、島本（1989）においては、以下のような分類となっており、「ルーレットがクルクル回る」という例文が付されている。

① 何回も軽そうに回る・回すようす。
② 何かを紙で巻く。厚い紙などを筒状に巻く。紙などでくるむようす。

本設問における日本語母語話者の正解率は、90.6%である。一方、留学生は、11.1%となっている。オノマトペ以外の回答（回転等）は31.1%であった。加えて、46.8%の留学生が「グルグル」、「コロコロ」、「ペラペラ」、「マルマル」等のオノマトペを回答として挙げていた。

カイ二乗検定によって、日本語学習者による「クルクル」の回答パターンの分布が、日本語学習歴の分布に従っているかどうかを確認した結果、カイ二乗

検定の統計量は12.05であり、p値は0.21であった。よって、「クルクル」の正答率と日本語学習歴の関連は認められなかった。

また、日本語能力との関連について明らかにするため、カイ二乗検定を行った結果、統計量は16.682であり、p値は0.18であった。よって、「クルクル」の正答率と日本語能力の関連についても認められなかった。

４.４　「キラキラ」の概要と日本語学習者の回答

「キラキラ」は、以下の設問および静止画により調査を行った。

設問（4）目が（　　）している。正答：キラキラ

「キラキラ」は単一の意味を有するオノマトペである。阿刀田・星野（1995; p.101）には以下のように記されており、「ネオンサインがキラキラ点滅している」という例文が付されている。

- 小さい光体が小刻みに連続して光り輝くようす。雰囲気など比喩的に用いる場合がある。

島本（1989）では、以下のように解説されている。

- （＋イメージ）美しく断続的に光るようす。

本設問における日本語母語話者の正答率は95.9%である。一方、留学生は、36.6%となっている。オノマトペ以外の回答（「はっと」等）は12.6%であった。加えて、49.2%の留学生が「キラキラ」以外のオノマトペ（「ピカピカ」等）を回答として挙げていた。

これまでの手順と同じように、回答パターンの分布が、日本語学習歴の分布に従っているかどうかを見た結果、カイ二乗検定の統計量は5.59であり、p値は0.77であった。よって、「キラキラ」の正答率と日本語学習歴の関連は認められなかった。

また、「キラキラ」の回答パターンの分布が、日本語能力の分布に従っているかどうかについても同じように、検定を行った。カイ二乗検定の統計量は7.00であり、p値は0.18となり、「キラキラ」の正答率と日本語能力の関連について

も認められなかった。

4.5 「サラサラ」の概要と日本語学習者の回答

「サラサラ」は、以下の設問および静止画により調査を行った。

設問（5）砂が（　　）と落ちていく。正答：サラサラ

「サラサラ」は、複数の意味をもつオノマトペである。阿刀田・星野（1995; p.185）には、以下のように記されている。

① 軽く、薄く、粘り気がない状態のものが集まって細かく触れ合う連続音・ようす。水がさざなみ立って流れる音・ようすにもいう。
② 運筆・弁舌などがよどみなく進むようす。態度がさりげないようす。
③ あぶら気、湿気がなく快く乾いているようす。

上述の①は擬音語と擬態語、②および③は擬態語である。本調査においては①の意味を有する修飾用法を取り上げている。島本（1989; p.62）では以下のような分類となっている。

① ［否定形が後に来て、野心・悪心など良くない気持ちの存在を、打ち消す場合に言う。］全く。
② 水が小さい音を立てて流れるようす・音。
③ （＋イメージ）ねばりけがないようす。

本設問における日本語母語話者の正答率は89.2%である。一方、留学生は、7.9%となっている。オノマトペ以外の回答（副詞の「だんだん」等）は17.4%であった。加えて、59.2%の学生が「ザラザラ」、「チョンチョン」、「スイスイ」、「トントン」等のオノマトペを回答として挙げていた。

正答率と日本語学習歴について、カイ二乗検定の統計量は5.27であり、p値は0.81であり、関連は認められなかった。また、日本語能力を指標とした分析を行った結果、カイ二乗検定の統計量は16.65でありp値は0.33であったため、日本語能力との関連についても認められなかった。

４.６ 「ドキドキ」の概要と日本語学習者の回答

「ドキドキ」は、以下の設問および静止画により調査を行った。

設問（6）試験前で胸が（　　）している。正答：ドキドキ

阿刀田・星野（1995; p.313）では、以下のように記されている。

① 激しい運動や精神的なショックで心臓が激しく連続して鼓動する音・ようす。
② 不安や恐怖、期待などで緊張しているようす。

島本（1989; p.117）では、以下のように記述されている。

- 激しく運動した後や、びっくりした時に心臓の鼓動が早く強く感じられる形容。

本設問における日本語母語話者の正解率は、93.2%である。一方、留学生は、57.1%となっている。オノマトペ以外の回答（「緊張」等）は15.0%であった。加えて、23.0%の留学生が、「ムクムク」、「トキトキ」、「ドンドン」等のオノマトペを挙げていた。

正答率と日本語学習歴の関係について、カイ二乗検定を行った結果、統計量は4.81であり、p値は0.8501882であった。よって、両者の関連は認められなかった。

また、「ドキドキ」の回答パターンの分布が、日本語能力の分布に従っているかどうかについても同じように検定を行った結果、カイ二乗検定の統計量は、38.44であり、p値は0.000774であった。よって、「ドキドキ」の正答率と日本語能力試験の取得級には、関連が見られることが分かった。

４.７ 「フラフラ」の概要と日本語学習者の回答

「フラフラ」は、以下の設問および静止画により調査を行った。

設問（7）酔っぱらって（　　）歩く。正答：フラフラ

阿刀田・星野（1995; p.175－176）では、以下のように記されている。

① 不安定な状態で力なく連続して揺れ動くようす。
② 疲れ切って体が正常に動かないようす。
③ 意志力に欠け、考えや気持ちが不安であるようす。

島本（1989）では、以下のような分類となっており、「二日酔いで頭がふらふらする」という例文が付されている（p.175－176）。

① 体が揺れる・揺れるような感じがするようす。
② 落ち着かなくて動き・気持ち・考えが変わりやすいようす。

本設問における日本語母語話者の正解率は、86.5%となっている。一方、留学生は、22.2%となっている。オノマトペ以外の回答（「酔い」等）は18.2%となっている。加えて、47%の留学生が「ソロソロ」、「チョイチョイ」、「グログロ」、「バタバタ」等のオノマトペを回答していた。

同様の手順で分析を行った結果、カイ二乗検定の統計量は21.02であり、p値は0.01であった。よって、「フラフラ」の正答率と日本語学習歴には関連があることが示唆された。

また、「フラフラ」の回答パターンの分布が、日本語能力の分布に従っているかどうかについては、カイ二乗検定の統計量が13.98であり、p値が0.52であったことから、両者の関連は、認められなかった。

4.8 「ノロノロ」の概要と日本語学習者の回答

「ノロノロ」については、以下の設問および静止画により調査を行った。

設問（8）カメは歩くのが遅い。いつも（　　）と歩いている。正答：ノロノロ

「ノロノロ」は、単一の意味をもつオノマトペ（擬態語）である。阿刀田・星野（1995; p.359）には以下のように記されている。

• 運動の進行が非常にゆっくりしているようす。

島本（1989; p.148）では、以下のように書かれており、「タクシーに乗ったが、のろのろ運転で、ここまで来るのにいつもの３倍の時間がかかった」という例文が出ている。

• 人や物の動きが遅いようす。

本設問における日本語母語話者の正解率は、73.8%となっている。一方、留学生は、30.1%となっている。オノマトペ以外の回答（「小さい」等）は21.4%となっている。加えて、36.5%の留学生が「ハヤハヤ」、「エンエン」等のオノマトペを回答として挙げていた

「ノロノロ」についても、同じくカイ二乗検定を用いて分析を行った結果、日本語学習歴との関連は認められなかったが（カイ二乗検定の統計量＝9.15，p値＝0.42）、日本語能力試験の取得級とは関連があることが分かった（カイ二乗検定の統計量＝26.08，p値＝0.0037）。

４.９　「ニコニコ」の概要と日本語学習者の回答

「ニコニコ」は、以下の設問および静止画により調査を行った。

設問（9）あの女の子は明るくて、いつも（　　）笑（わら）っている。

正答：ニコニコ

「ニコニコ」は、単一の意味をもつオノマトペであり、阿刀田・星野（1995; p.341）では、以下のように解説されている。

• うれしさ、快さを感じて和やかに、声を挙げずに笑っているようす。

島本（1989; p.141）では、以下のように記述され、「銀行の窓口の人は、入金の時はにこにこ笑う」という例文が付されている。

• (＋イメージ)[「笑う」「する」などが後に来て］明るく・嬉しそうに・幸福そうに笑うようす。

本設問における日本語母語話者の正解率は、85.9%となっている。一方、留

学生は、55.5％となっている。オノマトペ以外の回答（笑顔等）22.2％となっている。加えて、13.4％の留学生が「ニヤニヤ」、「ゲレゲレ」などのオノマトペを回答として挙げていた。

「ニコニコ」について分析を行った結果、日本語学習歴との関連は認められなかったが（カイ二乗検定の統計量＝10.21，p値＝0.33）、日本語能力試験の取得級とは関連があることが分かった（カイ二乗検定の統計量＝28.51，p値＝0.018）。

４.10 「ペラペラ」の概要と日本語学習者の回答

最後に、「ペラペラ」についての概要と結果をまとめる。以下の設問、および静止画によって回答を収集した。

設問（10）兄はアメリカの大学に行ったので、英語が（　　）だ。

正答：ペラペラ

「ペラペラ」は、複数の意味を持つオノマトペである。阿刀田・星野（1995; p.483）には以下のように記されている。

① 立て続けに軽薄にしゃべるようす
② 外国語などをよどみなく流暢に話すようす

島本（1898）では、以下のような分類となっており、「あの人は英語をペラペラにはなす」という例文が記載されている。

① ［口が後について］速く・上手に話すようす
② ［－イメージ］次から次へと考えなしにはなすようす
③ 本・ノートなどのページをめくる音

本設問における日本語母語話者の正解率は、99.3％となっている。一方、留学生は、50.7％となっている。オノマトペ以外の回答（「完璧」等）は16.6％となっている。加えて、23.8％の留学生が「ベラベラ」、「スラスラ」、「バラバラ」等のオノマトペを回答として挙げていた。

カイ二乗検定の結果、「ペラペラ」の正答率と日本語学習歴の関連は認められ

なかった（統計量＝6.85，p値＝0.65）であった。一方で、日本語能力の取得級については関連があることが明らかとなった（統計量＝28.38，p値＝0.019）。

5．考察

本章においては、前章までの主な結果をまとめ、オノマトペの正答率およびカイ二乗検定の結果をもとに考察する。

5.1　オノマトペと日本語学習歴

本章では、日本語学習者のオノマトペ回答パターンと日本語学習歴について考察する。正答率を見ると、大きく分けて正答率が極めて低いものと、比較的高いものに二分できる。例えば、「クルクル」や「サラサラ」を問う設問における正答率がそれぞれ、11.1%（母語話者の正答率は89.3%）と7.9%（母語話者の正答率は89.3%）である。これに対して、「ドキドキ」や「ニコニコ」については、それぞれ57.1%（母語話者の正答率は93.3%）と55.6%（母語話者の正答率は85.9%）と、半数以上が正答を記入している。

正答率が著しく低かった「クルクル」および「サラサラ」、また正答率が高かった「ドキドキ」「ニコニコ」については、日本語学習歴と関連が認められないという結果となった。また、調査項目である10語のうち、日本語学習歴と関連が見られたのは「フラフラ」のみであった。Ivanova（2006）は、オノマトペはその種類が豊富であり、日本語学習者にとっては、意味の推測が難しいことから、習得が困難であると指摘する。また、三上（2003）によれば、学習者が用いる日本語教材において、多くのオノマトペは学習項目として教材の中で扱われていない。こうした先行研究も、日本語学習歴がオノマトペの習得と関連がないことを示唆している。

5.2　オノマトペと日本語能力

前節においては、日本語学習歴と正答率との関係が認められない点について述べた。本節では、日本語能力試験の取得級との関連について述べる。日本語能力試験とは、日本国際教育支援協会と独立行政法人国際交流基金が主催するもので、日本語を母語としない人の日本語能力を認定する語学検定試験である。N1（上級）からN5（初級）までの5段階および未取得に分けて分析を行った。カイ二乗検定の結果、調査対象となったオノマトペの中で、正答率と日本語能

力試験の取得級に関連が認められたのは、「ドキドキ」、「ノロノロ」、「ニコニコ」、「ペラペラ」の４語であった。先述のように、オノマトペは学習項目として教材の中で扱われる機会が多くないことが分かっているが、これらのオノマトペが実物教材（authentic material）に頻出である可能性を考え、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下BCCWJ）を用いて、その頻度を調査した。BCCWJとは、書きことばの使用頻度やその共起語を明らかにするために構築されたコーパスであり、唯一の日本語均衡コーパスである。書籍、雑誌、新聞、インターネットなど、さまざまな媒体から１億430万語のデータを収録している。BCCWJを用いて「ドキドキ（どきどき）」を検索した結果、1,188件が検出された。また、「ニコニコ（にこにこ）」に関しても978件が検出された。一方、「ノロノロ（のろのろ）」は290件、「ペラペラ（ぺらぺら）」は185件であり、決して頻度が高いとは言えない。また、最も正答率の低い「サラサラ（さらさら）」は626件、「クルクル（くるくる）」は606件検出されており、使用頻度だけでは説明が難しいことが示唆された。

５．３　習得困難であるオノマトペ

先述のように、著しく正答率が低かったオノマトペは「クルクル（正答率11.1%）」および「サラサラ（正答率7.9%）」である。また、「フラフラ（正答率21.2%）」「ゲラゲラ（正答率24.8%）」についても、正答率が低い。これらのオノマトペについて、２つの特徴を述べたい。第一に、習得困難であるオノマトペは、音韻的に類似した意味の異なるオノマトペが存在することがあげられる。例えば、「サラサラ」と「ザラザラ」、「フラフラ」と「ブラブラ」、「クルクル」と「グルグル」などである。本調査においても、「サラサラ」と回答すべき設問において「ザラザラ」と回答する学習者が３名いたが、これは、オノマトペの構成音が清音から濁音に変化することで生じる意味変化を捉えることが学習者にとって困難であることを示唆している。第二に、習得困難であるオノマトペには多義性がある。例えば、「クルクル」は、軽いものが連続的に速く回転する様子を示すオノマトペであるが、ほかにも、手早く巻きつける様子や、ものを丸める様子、目がよく動く様子、まめに働く様子、考えが頻繁に変わる様子など、複数の意味を有する。こうした多義性のある語は「ニコニコ」や「ドキドキ」のような単一の意味で使用される語と比較し、習得が困難である可能性がある。

５．４　未知のオノマトペ産出にかかるストラテジー

本節では、日本語学習者が未知のオノマトペを学習する際、どのようなストラテジーを用いるのかについて論じる。誤答に記されたオノマトペについて検討した結果、日本語学習者は、文脈に沿ったオノマトペに関する知識をもたない場合、ABっ型（からっ）、AB り型（からり）、ABん型（からん）といったものではなく、ABAB型（からから）のようなオノマトペを産出する傾向があることが明らかとなった。例えば、設問１の「暑くて喉が（カラカラ）だ。」については「カワカワ」という回答が見られた。このような擬態語は存在しないが、喉が「乾く」という語からABAB型のオノマトペを産出したと思われる。ほかにも、設問７の「酔っ払って（フラフラ）歩く」についても、「チョイチョイ」、「グログロ」といった回答が見られたが、これもABAB型である。

６．まとめ

本章では、調査の結果と考察から、先述した２点の研究課題についてまとめる。

（1）日本語学習者にとってどのようなオノマトペの習得が困難であるか

（2）日本語学習者が未知のオノマトペを産出する際に、どのようなストラテジーを用いるのか

（1）については、類似した形態との混同（「ハラハラ」、「バラバラ」、「パラパラ」など）が見られ、こうしたオノマトペの正答率は低いことが明らかとなった。また、音韻的な類似性のみならず、オノマトペの多義性が習得を困難にしていることも示唆された。次に、オノマトペの産出に差異が生じる場合、それは使用頻度によるものではない、という点についても、BCCWJを用いて検証が可能であった。（2）についても、学習者の母語との関連は検証できなかったが、主にABAB型を用いて、未知のオノマトペを産出していることが明らかとなった。

一方で、本研究には課題も残されている。例えば、日本語学習者が日常生活の中でオノマトペにどの程度触れているか、という点については、調査が及ばなかった。今後は、「日本語による日常会話に参加する機会があるか」あるいは「日本語を媒介語とする漫画、アニメ、ゲーム等のコンテンツに触れる機会があるか」といった質問項目を設定した上で、日本語学習者のオノマトペ習得との関連性について検討を加えたい。また、現在得られている回答数では、分布変化の結果に極端なばらつきが生じるため、学習者の母語の影響についても、十

分な検討ができなかった。この点については、今後調査協力者を増やし、学習者の母語ごとに分類することで、母語によるオノマトペ習得の差について検討したい。

参考文献

Ivanona, G. (2006). Sound-symbolic approach to Japanese mimetic words. *Toronto working Papers in Linguistics,* 26, 103 − 114.

阿刀田稔子・星野和子（1995)『擬音語・擬態語使い方辞典：正しい意味と用法がすぐわかる（第２版)』創拓社.

赤間咲良（2022)「『小声で泣く様子』を表すオノマトペの形態と地域差」『日本語学会2022年度秋季大会発表資料』G − 5.

グエン・ティ・タイン・トゥイ（2017)「日本語オノマトペの習得におけるベトナム語母語話者の強み」『一橋大学国際教育センター紀要』8, 69 − 80.

グエンティ タイン トゥイ（2018)「中国人日本語学習者による日本語オノマトペの使用実態と産出傾向: ベトナム人日本語学習者との比較」『一橋日本語教育研究』6, 41 − 50.

島本基（編)（1989)『日本語学習者のための副詞用例辞典』凡人社.

周超超・葛茜（2022)「 研究ノート：中国人日本語学習者のオノマトペの習得研究―音象徴性を中心に―」『日本語・日本学研究 / 東京外国語大学国際日本研究センター［編］』12, 133 − 150.

田守育啓（2002)『オノマトペ 擬音・擬態語を楽しむ』岩波書店.

三上京子（2003)「初級から教えるオノマトペ ―基本オノマトペの選定とその教材開発に向けて―」『ヨーロッパ日本語教育』9, 163 − 168.

三上京子（2006)「日本語教育のための基本オノマトペの選定とその教材化」『ICU日本語教育研究』3, 49 − 63.

吉村治正（2020)「ウェブ調査の結果はなぜ偏るのか」『社会学評論』71(1), 65 − 83.

廉沢奇（2022)「『日本語日常会話コーパス』に見る ABAB 型基本オノマトペの音韻パタン：日本語教育の視点から」『言語資源ワークショップ2022：プログラム』o1 − 2s.